

Title	オスマン語をめぐって：多言語帝国としてのオスマン帝国と言語的共存
Sub Title	
Author	鈴木, 豊(Suzuki, Tadashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1994
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.63, No.3 (1994. 3) ,p.81(301)- 89(309)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム「文明語の比較社会史：漢文,オスマン語,中世ラテン語」 一九九二年度三田史学会大会
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19940300-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オスマン語をめぐつて

—多言語帝国としてのオスマン帝国と言語的共存—

鈴木 董

一、多言語帝国としてのオスマン帝国

オスマン帝国は、西暦一三世紀末葉に、イスラム世界の当時の西北のフロンティアであり、イスラム世界とビザンツ世界の境界地帯となっていたアナトリアの最西北端の地において、歴史に登場した。

その辺境においてオスマン帝国が誕生したイスラム世界は、多言語世界であった。そこでは、イスラムの預言者ムハンマドの母語であり、聖典『コーラン』の言語でもあるアラビア語が、第一の共通の「文明語」としての位置を占め、その下で、ムスリムであると非ムスリムであるとを問わず、様々の言語操る人々が、各々の言語を母語として保ちつつ、共存していた。

これと相い対するビザンツ世界においてもまた、ギリ

シア語が、「文明語」として君臨しながら、その下には、アルメニア語やスラヴ系の諸言語をはじめ、様々な言語を母語とする人々が共存していた。とりわけ、ビザンツ世界の西半をなすバルカンは、多種多様な言語を操る人々の集団のモザイクの觀を呈していた。ビザンツ世界は、イスラム世界以上に、多言語世界であったといえる。

イスラム世界とビザンツ世界の交錯する境界地帯に生じたオスマン帝国は、一五世紀中葉までに、アナトリア（アナドル Anadolu）とバルカン（ルメリ Rumeli）を含めたビザンツ世界をほぼ包摂し終わり、一六世紀中葉までは、イスラム世界の中核地域のうち、東のイランと西のモロッコと、そしてアラビア半島の一部を除く地域を、ほぼ支配下に收め、單なる辺境の一國家から、イスラム世界のイスラム的世界帝国ともいうべきものとなつ

た。

そして同時に、オスマン帝国は、イスラム世界とビザンツ世界の多言語性をも、受け継いだのであった。こうしてオスマン帝国は、日常語はもとより、「文明語」さえ異なる様々な言語集団のモザイクのような、複合的な多言語帝国となつたのであった。

一、「文明語」としてのオスマン語の成立

オスマン帝国は、アナトリアの辺境のムスリム・トルコ系のガーズィー *gazi*（聖戦の戦士）集団に起源を有していた。それゆえ、原初において、支配層の人々の母語及び日常語は、現代トルコの語学者のいうところの古アナトリア・トルコ語（エスキ・アナドル・テュルクチエ *Eski Anadolu Türkçesi*）と呼ぶトルコ語であった。

そして、少なくとも原初のオスマン集団は、イスラム世界の「文明語」であつたアラビア語とペルシア語を駆使し得るには、余りに素朴な辺境の人々であつたことであろう。

そもそもイスラム世界の形成確立の過程で、まずはじめに、イスラム世界全体の「文明語」となつたのは、イスラムの最初の担い手であるアラブ人の言語であり、聖

典『コーラン』のことばでもあるアラビア語であった。

いま一つ、イスラム世界の主に東半分において、第二の文明語となつたのが、ペルシア語であった。そして、この二つの「文明語」は、ともにアラビア文字によつて綴られることとなつた。

イスラムの影響が中央アジアに浸透していくにつれて、一方では中央アジアのトルコ人のイスラム化が進行し、他方では、トルコ人がイスラム世界の心臓部へと進出し、次々と王朝を築き始めた。これらのムスリム・トルコ系の諸王朝においても、行政のための公用語及び文学語としては、ペルシア語が用いられ、学問と信仰のことばとしては、主としてアラビア語が用いられていた。

西暦一一世紀末に、アナトリアに入つたムスリム・トルコ系勢力が樹立したルーム・セルジューク朝は、オスマン朝の直接の先行王朝であつたが、ここでも、公用語及び文学語としては、イスラム世界の古くからの二つの代表的「文明語」の一つである、ペルシア語が用いられていた。トルコ語も、アラビア文字によつて綴られるようになつていつたが、それはなお、主として日常語にとどまり、「文明語」には、十分に転化し得ていなかつた。アナトリアのムスリム・トルコ圏で、トルコ語が国家

の公用語として始めて用いられたのは、一二世紀後半以降、ルーム・セルジューク朝が解体していくなかで登場してきた、ムスリム・トルコ系の君侯国（ベイリクbeylik）の一つであるカラマン君侯国においてであったといわれる。

オスマン朝もまた、ルーム・セルジューク朝の分裂後、ムスリム・トルコ系の諸君侯国と戦士（ガーディー）集団の割拠するなかで、一三世紀末に、アナトリア西北端の小ガーディー集団として、歴史に登場してきた。オスマン朝においては、殆どその原初以来、いわば第一公用語として、アラビア文字で綴られたトルコ語が、用いられていたようである。

このことは、原初のオスマン朝の人々がはつきりと意識してトルコ語を用いたことを必ずしも示している訳ではないと思われる。むしろ、オスマン朝が出現した舞台が、イスラム世界の西北のフロンティアであるアナトリアの、さらに最西北端の辺境であつたことによるところが大きかつたであろうと思われる。

やや後代の一五世紀後半に成立したものが多いが、オスマン朝の古年代記類のなかでは、初期のオスマン集団は、そもそも、ものを読み書き出来る者も稀な、素朴な

戦士たちの集団として描かれている。それは、ある程度、原初のオスマン集団の現実とも照応しているように思われる。実際、初期のオスマン国家において、公文書を扱い、支配の組織を創り出し整備していく役割を担つたのは、原初からの戦士集団としてのオスマン集団の構成員ではなく、ルーム・セルジューク朝以来のアナトリアのムスリム・トルコ圏内の先進地帯の諸文化拠点で養成されたウレマ—ulema（イスラム法学者）系の外来者たちであった。そして、自らもムスリム・トルコ系のこれらの外来者たちも、辺境の現実のなかで、公文書を作製するにあたり、日常語であるトルコ語を主として用いたのであつた。

もちろん、オスマン朝が、辺境の戦士集団からアナトリア西北部の君侯国へ、さらには、アナトリアとバルカンに拡がるイスラム世界の一地方帝国へと発展していくなかで、イスラム世界における古くからの「文明語」としてのアラビア語とペルシア語もまた、かなり重要な役割を果たしていたことにも疑いはない。当時の公文書のなかでも、とりわけ、宗教寄進文書（ヴァクフイエvakfiye）は、すでに早くからアラビア語で書かれることが多かつた。また、財政文書では、しばしばペルシア

語が用いられた。学問の世界では、アラビア語が広く用いられはじめ、文学の世界では、ペルシア語が優位を占めた。

しかし、フロンティアの帝国というべきオスマン帝国においては、支配集団の日常語でもあり、早くから公用語としても用いられたトルコ語が、独自の発展を示すに至つた。とりわけ、オスマン朝がビザンツ帝国を滅ぼし、ビザンツの帝都コンスタンティノープルを新たな拠点都市とするに至つた一五世紀中葉から、一六世紀初頭にかけて、トルコ語の公用語、文学語としての発展は、加速化していった。

そして、一五世紀末から一六世紀初頭にかけての時期に、現代のトルコ共和国の言語学者たちが「古アナトリア・トルコ語」と呼ぶものから、日常語においても、文章語においても、それとはやや異なるトルコ語への変容が進行していった。こうして成立したものが、広義のオスマン語（オスマンルジャ Osmanlica）であった。そのうちで、文学語、公用語として用いられる文章語としてのオスマン語のなかから、日常語とはかけ離れた、アラビア語的・ペルシア語的語彙と語法が多く混入した独特の言語が成立してきた。そして、このことばが、從来か

らの「文明語」であつたアラビア語・ペルシア語と並んで、オスマン帝国における第三の「文明語」となつていつた。これにて、狭義のオスマン語である。以下オスマン帝国における新しい「文明語」としての狭義のオスマン語をさすこととしよう。

一六世紀には、政治体としてのオスマン帝国は、アナトリアとバルカンに加えて、シリア、エジプト、アラビア半島の大部分から、さらにモロッコを除く北アフリカ一帯までを支配下におき、イスラム世界の中核地域における中心的な政治体、イスラム的世界帝国ともいいうるものへと発展していった。ちょうど同じ頃、新しい「文明語」としてのオスマン語もまた、文学語としても、独自のスタイルと美を具えたディーザン diwan 詩（古典定型詩）等を生み出して確立し、公用語としても、独自の洗練された様式をもつものに発展し、「文明語」として確たるものになつていつた。

それとともに、オスマン帝国のエリートたるオスマン人（オスマンル Osmanlı）のあいだでは、賞讃に倣いする資格の一いつとして、「『[1]』言語（エルシーネ・イ・セラーセ elsine-i selâse）」と通じてゐる」ということが、

あげられるようになつていつた。ハハハ、「[1]語」
とは、いうまでもなく、アラビア語、ペルシア語、そし
てオスマン語としてのトルコ語を意味していた。ハハ
とは、オスマン語が、古くからのイスラム世界の共通の
「文明語」であるアラビア語とペルシア語と並ぶ「文明
語」と化したことを示している。

二、帝国のコミュニケーション・システムと言語的共存

オスマン帝国における第三の「文明語」としてのオス
マン語は、一五世紀後半から一六世紀にかけて、ますま
す君主專制的・中央集権的となつていつたオスマン帝国
の支配組織のコミュニケーションの中心的手段となつた。
帝国の最高政策決定機関である「ディーヴァーヌ・ヒュ
マユーン Divan, Hümeyyun (御前会議)」において、そ
の構成員たるオスマン帝国中央の高官たちの議論は、専
ら少なくとも広義のオスマン語によつて行われており、
そこでの決定の記録である「ミユヒンメ・デフテリ
mühimme defteri (御前会議重要議事録)」もまた、オス
マン語で記録されていた。帝国中央から発せられる勅令
(フェルマ ferman) や勅許状 (ベラート berat) も、

あげられるようになつていつた。ハハハ、「[1]語」

大部分は、オスマン語で記されていた。

そもそも、オスマン語は、オスマン帝国の中枢を占め
る支配エリートとしてのオスマン人たるための必須要件
の一つとなつた。すなわち、オスマン人たるための要件
は、ムスリムであること、オスマン朝に仕えていること、
オスマン的生活様式を身につけていること、そしてオス
マン語を操りうることからなつていた。

しかし、同時に、オスマン帝国は、決して単なるトル
コ「民族国家」ではなく、一箇の「イスラム帝国」、そ
れも、「イスラム的世界帝国」というべき政治体であつ
た。そこでの政治社会の統合の基軸は、民族ではなく、
宗教に求められた。それゆえ、言語の面でも民族として
も多種多様な人々は、何よりもまず、宗教によつて分類
され社会的に位置づけられていたのであつた。そして、
これらの様々な人々自身のアイデンティティの第一義的
な根源もまた、多くの場合、言語を核に想定された民族
によりも、むしろ言語を超えた宗教に求められた。前近
代のオスマン帝国においては、言語は、人々のアイデン
ティティーの最大のシンボルというよりは、むしろ、コ
ミュニケーションの手段にとどまつていたということが
できよう。

このような状況の下で、オスマン帝国においては、多宗教・多民族の一應の共存が容認されていたのと同様に、多言語の共存もまた、原則として容認されていたのであつた。オスマン帝国においては、「文明語」としてのオスマン語に基礎をおく全帝国大のコミニニケーション・システムの下に、他の諸言語に基礎をおく複数のコミュニケーション・システムのサブ・システムが、共存していた。

それらのサブ・システムのなかには、日常語のみからなるものの他に、そのサブ・システム自体の独自の「文明語」をもつものもあつた。

ムスリムを主な担い手とするコミニニケーションのサブ・システムのなかでも、特に、古来の「文明語」であるアラビア語に基づくサブ・システムにおいては、

「文明語」としての文語アラビア語（フスハ）と、各地域の日々の日常語としての口語アラビア語（アンミーア）からなりたつており、とりわけ、文語アラビア語は、アラブ地域においては、殆どオスマン語に代わる公用語として機能していた。ここでも、帝国中央との公文書の往復には、主としてオスマン語が用いられていたが、下達にあたつてはオスマン語の公文書はアラビア語の翻訳を附して伝達され、さらに、アラビア語で綴られた公文

書が中央で発せられることがあつた。また、地域の生活により密着したイスラム法官（トルコ語でカドゥ *kadı*、アラビア語でカーディー *qadi*）の法廷文書（トルコ語で、シェリー・マフケメ・シジルレリ *şerî mahkeme sicilleri*、アラビア語で *sidjillât el-mahâkim*）などは、アラブ地域においては、少なくともその本体は、通例アラビア語で記されていた。

非ムスリムの臣民の間においても、とりわけ、ギリシア正教徒、アルメニア教会派、ユダヤ教徒については、各々の宗教社会の「文明語」であるギリシア語、アルメニア語、ヘブライ語を、各々のサブ・システムの「文明語」とするコミニニケーションのシステムが、成立していた。

ユダヤ教徒を担い手とする、ヘブライ語を「文明語」とするサブ・システムにおいては、日常語として、アラビア語、ラディーン、そしてイデッショを用いる三つのサブ・グループを含みつつ、その上位に、日常語としては既に死語と化しており、主として宗教と学問にかかわる「文明語」としてのヘブライ語が位置していた。

ギリシア語を核とするサブ・システムにおいては、ギリシア語を母語とするギリシア正教徒を中心的担い手と

しつつ、宗教宗派は同じくしながらも母語を異にする、ギリシア正教徒のブルガリア人やアルバニア人等をも包摂し、それ自体がまた、ギリシア語を「文明語」とする複合的な多言語システムを形成していた。

これらの、各々の独自の「文明語」を有するサブ・システムにおいては、各々の「文明語」を主要な文章語とする独自の文学や学問の世界が構築されていた。そしてまた、その再生産のための各々の言語による教育機関の活動も、通例容認されていた。とりわけ、非ムスリムの諸サブ・システムについては、西欧世界の技術革新の成果の一つである活版印刷術の導入による出版活動も許容されていた。実際、ヘブライ語の場合には一四九二年、アルメニア語の場合には一五六七年、ギリシア語の場合には一六一七年に、各々の言語と字母による活版印刷所の開設が許可され、活発な印刷出版活動が継続的に行なわれていた。

このような、他言語に基く多くのコミュニケーション

のサブ・システムを許容していたオスマン帝国の体制の下においては、帝国の支配組織の公的コミュニケーションについてさえ、しばしば、ムスリムのアラビア語のみならず、非ムスリムのギリシア語、アルメニア語、ヘブ

オスマン語をめぐって

ライ語などの各々のサブ・システムの「文明語」そのもの、ないしは、少なくともその文字を用いた勅令や勅許状が、発せられた。そこでは、政治的支配にとつて、社会の言語的統一と支配のための言語の一元化は、決定的に重要な要件とは考えられていなかつたのであつた。そこで、「文明語」としてのオスマン語の下に、諸言語の緩やかな統合がめざされるにとどまつたのであつた。

多言語帝国としての前近代のオスマン帝国においては、少なくとも支配者から見る限り、言語は、何よりもまずコミュニケーションの手段であり、たとえそれが、言語を異にする様々の人々のアイデンティティのシンボルとしての意味を多少とも帶びていたとしても、そのことがオスマン帝国の「オスマン人」による政治的支配を脅かす要素たりうるという認識を欠いていたかに見える。前近代のオスマン帝国においては、言語は、文化的争点でもなく、ましてや、政治的争点となりうるものとは、殆ど考えられていなかつたのであつた。

四、多言語帝国からバベルの塔へ

多言語帝国としてのオスマン帝国に対する試練は、西方から來ることとなつた。すなわち、ビザンツ世界消滅

後、イスラム世界と直接対峙してきた西欧キリスト教世界が近代西欧世界へと変容していく過程において、絶対王政下で領域国家が形成されていくにつれて、言語の統一が政治的統一にとつても重要なものと目されるようになつていつた。そしてさらに、言語は、単なるコミュニケーションの手段であるのみならず、アイデンティティーのシンボルとしての色彩をも帯び始めたのであつた。すなわち、そこでは、のちにナショナリズムとネーション・ステイトの形成へとつらなる要素が成立しつつあつたのであつた。

かつて優位に立つっていたオスマン帝国の西欧世界との間の力関係は、一七世紀を通じて逆転し始め、一八世紀に入ると、決定的にオスマン側にとつて不利に傾いていつた。こうしたなかで、一八世紀後半以降、オスマン帝国の、とりわけバルカンの非ムスリム臣民のなかに、当時西欧で生じつつあつた言語の意味の転換の影響が及び始めた。その先駆的な例の一つはコライス Korea に代表されるギリシア人の文化的ナショナリズムの覚醒と、ギリシア語のありようについての再検討の試みの開始であつた。この文化的ナショナリズムは、まもなく、政治的ナショナリズムへと転化していつた。

ギリシア語を母語としないバルカンのギリシア正教徒のなかでは、ギリシア語に基盤をおくギリシア正教徒のサブ・システム内における「文明語」としてのギリシア語の優越と、ギリシア語を母語とするギリシア正教徒による他言語を母語とするギリシア正教徒に対する「ギリシア化」の試みへの反撲も生じていつた。一八世紀中葉におけるブルガリア人の修道士パインシがブルガリア語を用いてブルガリア人の歴史を著わしたのは、このような反撲の表現の嚆矢の一つであつた。

こうして、多言語帝国としてのオスマン帝国においても、一八世紀末以降、言語は、コミュニケーションの手段から、むしろアイデンティティーのシンボル、それも、文化的なシンボルから政治的なシンボルと化していつた。様々な言語を母語とする人々は、各々の言語に新しいアイデンティティーの根源を求め、「民族意識」に「自覚め」始めた。そして、各々の言語に基くコミュニケーションのサブ・システムを、自立した自己完結的なシステムたらしむべく努力し始めたのであつた。ナショナリズムと呼ばれる、この言語の意味転換はまた、母語、日常語と、「文明語」の一一致をも要求するようになつていつた。その日ざすところ、ネーション・ステイト形成

の理想は、何よりも端的に、一国家・一民族・一言語の実現として想定されたともいえよう。

このような状況の下で、「文明語」としてオスマン語が君臨する下に、他の言語に基く複数のコミュニケーションのサブ・システムが包摶されていた多言語帝国としてのオスマン帝国のシステムは、解体し始めたのであつた。そして、そこに生じた言語の意味転換が、バルカンの非ムスリム諸民族から、アナトリアの非ムスリム

民族へ、キリスト教徒のアラブ人へ、そしてムスリムのアラブ人、ついにはムスリム・トルコ系の「オスマン人」にまで及んだとき、多言語帝国としてのオスマン帝国の存立の基礎は、根底から搖らぐこととなつた。

これに加えて、オスマン帝国における「文明語」として君臨してきたオスマン語自身、ムスリムのトルコ人自身によつて、一方では、日常語からの乖離をもつて、他方では、アラビア語やペルシア語のような「非トルコ的」要素の多さをもつて、攻撃され始めるに至つた。こうして、多言語帝国のコミュニケーションのシステムにおいて、多くのサブ・システムを緩やかに包摶し統合していく要^{かなめ}にまで、動搖が及ぶこととなつたのであつた。「文明語」としてのオスマン語を核として成立してい

たオスマン帝国の多言語帝国体制は、言語が単なるコミュニケーションの手段から、「民族」という新しい共同体幻想のアイデンティティのシンボルと化したとき、崩壊していくことことが出来よう。すなわち、そこでは、言語が、文化的争点となるにとどまらず、政治的争点と化し、多言語帝国は、言語的ディスコミュニケーションの進行によって、「バベルの塔」と化していくとも言い得るであろう。

* 前近代におけるオスマン帝国の多言語帝国としての特質と、近代西欧の衝撃の下におけるその崩壊過程について、より詳しくは、拙著『イスラムの家からバベルの塔へ—オスマン帝国における諸民族の統合と共存』（リブロポート、一九九三年）を参照。